

市史をよみ

# がちまやあ Gači-majaa

第21号・2010年9月30日(木)発行

年3回 (5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係  
〒901-2710

沖縄県宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ \* \* ☎ \* ☎

☎ (098) 893-4430

Fax (098) 893-4434

E-Mail: [kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp](mailto:kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp)

※宜野湾市役所のホームページで、バックナンバーも公開中!!!

HP: <http://www.city.ginowan.okinawa.jp>

「デイゴの花が咲く」、「カマキリが高い位置に産卵した」年は、台風のあたり年とよく言われます。今年はデイゴがあまり咲かなかったので、台風は少なそうです。しかし、少ないなりに、9月には台風7号と9号が沖縄を久しぶりに直撃しました。本島北部では停電や蔡温松が倒れ、農作物に被害が出ました。

それでもかつてに比べると、被害規模は小さくなってきている気がします。1949(昭和24)年、グロリア台風が来襲した時は、地球上最大の暴風と報道され、宜野湾でもかなりの被害が出ました。全壊・半壊の民家が多数あり、宜野湾村役所のコンセット(カマボコ型の建物)も破壊されました。住民はなす術もなく家にこもるしかありませんでした。

復帰後も、台風が来ると食糧を買出ししてから、身を潜めるように家の雨戸を閉めきり、停電したらろうそくの明りの中でソーメンやカレーなどを作って、食べていた記憶のある方は多数いるかと思います。

被害が小さくなったといっても、大きな台風は来襲します。Uターンして3~4日沖縄周辺をウロウロした台風や、宮古島の電柱数百本をなぎ倒した台風もあります。台風は10月以降も来襲してたびたび被害をもたらしているのです。油断は禁物です。

最後に一つ。トンボを方言でアーケーजूといひ、台風前後にやってくるトンボをカジフチアーケーजूなどと呼んでいます。トンボをいっぱい見るようになったら、台風来襲のサインかもしれません。



↑ 台風で倒された普天間の並松 1955(昭和30)年

↓ 台風被害 1961(昭和36)年





# 宜野湾の綱引き、



# 韓国の綱引き

## 1. 宜野湾・沖縄の綱引き

宜野湾では7月から8月にかけて、真志喜と大山で綱引きが、野嵩で「ちなひちもうい」が行われました。宜野湾では旧ムラ 14 か所で旧暦 6 月 15 日か 24 日に行っていましたが、現在、毎年綱引きを行っているところは真志喜と大山の二か所だけです。

沖縄の綱引きの起源や由来ははっきりとしませんが、1713 年には行われていたと王府編纂の『琉球国由来記』にあります。沖縄の綱引きの特徴は、雄綱や雌綱などの複数の綱をカヌチ棒で合体させて引くことにあります。また、綱引きの合体前に、旗頭や踊りなどによる道ズネーがみられ、綱引き会場についてからも、ガーエーと呼ばれる綱引き前の示威行為が次々と繰り出されます。

真志喜・大山の綱引きで特徴的なことは、綱引き前に六尺棒でカヌチ部分を支え揚げて、空中で押し出すアギエーがあります。また、雄綱と雌綱のクーギと呼ばれる装飾の細工を入念に仕上げ、立たせるようにしつらえています。



真志喜綱引き アギエー



大山綱引き カヌチ棒で合体



野嵩ちなひちもうい

雄綱と雌綱の二つを合体させる宜野湾の綱引きは、一つの綱を引き合うのが主流となる日本の綱引きのなかでは少数に入ります。しかし、少し視野を広げてみると、韓国の綱引きに宜野湾と似かよった特徴を見ることができます。それはどのようなものなのでしょうか。市立博物館管理係長の平敷兼哉の紹介で韓国の綱引きを見てみましょう。

## 2. 韓国の忠清南道唐津郡機池市

平成 22 年 4 月 10 日、韓国の忠清南道にある唐津郡機池市で綱引きが行われました。私は沖縄県日韓親善協会（大城宗憲会長）の一員として、機池市の綱引き（韓国では「ジュールダリキ」と呼び、「拔河」と書く）を見学しました。

機池市の綱引きは、大韓民国重要無形文化財第 75 号に指定されています。同市では綱引き博物館を建設して、綱引き行事の一環で韓国、中国は湖南省瀏陽市、日本から沖縄・鹿児島県川内市・秋田県大仙市の三県から伝承者や研究者が参加して国際綱引き学術シンポジウムを開催するなど、市をあげて綱引き行事に取り組んでいます。特に今回は、韓国・中国・日本の綱引き関係者や研究者を委員に、アジア各地の綱引きをとおして文化交流を図ることを目的として「国際大綱引（拔河）交流委員会」が設立されました。



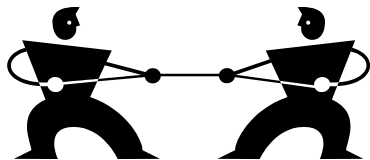


### 3. 機池市の綱引き

稲藁で編んだ全長 100mある雌雄の綱を並べ、綱の頭部（輪の部分）の前に供物を供え、綱引き祭り委員長や役員が祈願を行います。

祈願を終えると雌綱と雄綱に分かれて、数十本もの農旗を先頭に 1 km 先にある綱引き会場まで綱を引きずりながら進みます。行進は途中で休憩を取りながら進み、休憩の間、民族芸能の農楽隊が太鼓や鉦等の楽器を打ち鳴らしながら舞い踊ります。行進から 3 時間かけて綱引き会場へ到着します。会場には進行役の司会が実況できるように、ステージも設けられています。

綱は雌雄両綱を引きずって寄せ、輪の部分をつつけ合います。これを「コウサム」と言います。そして雌綱の輪の部分を立てて雄綱とつなげると、「ピニョモク」と言う貫棒（沖縄でいうカヌチ棒）を差し込み、ピニョモクの差し込み具合を確認し、祭り委員長の合図で綱引きが始まります。綱引きは三回行われ、引き終わる度にその場で再度引きました。綱引きが全て終わると、参加者が切り取って持ち帰りました。



綱引き祈願



役員



会場へむけて行進



ピニョモクを担いで行進



綱を引きずり行進



農旗



ピニョモクを差し込んだ綱



綱引きの様子

### 4. 大綱引きを見学して

機池市の綱引きを見学して、沖縄との類似性を次のように感じました。

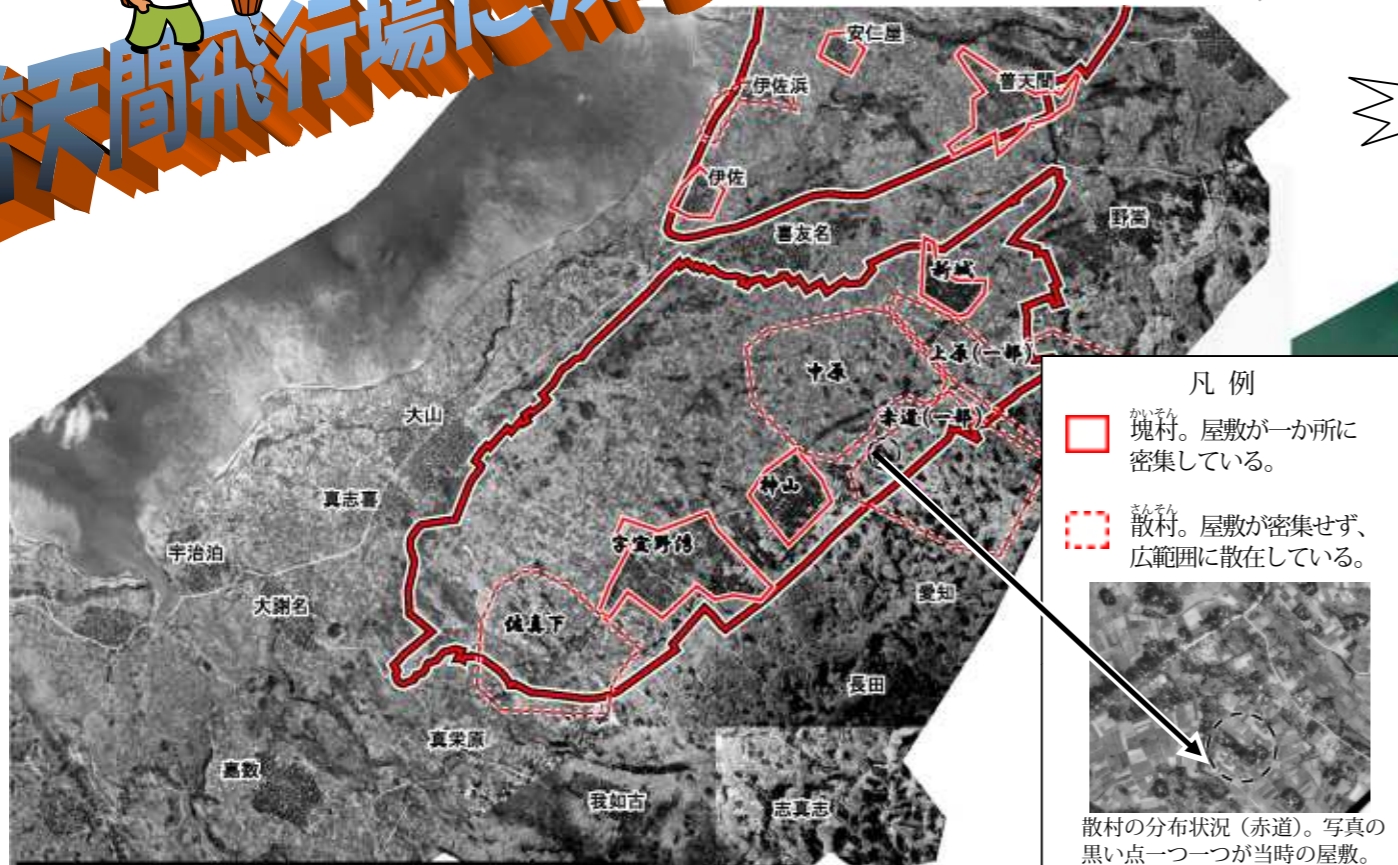
- ① 綱の形態…稲藁を使って雌綱、雄綱の両綱をつくる。
- ② 行進…沖縄の旗頭と形態は異なりますが、雉の羽を竿頭に飾って、「農者天下之大本也」「農商繁昌」「国寿民安」等の旗を掲げた「農旗」を先頭に農楽隊、綱と行進する。沖縄でいう道ズネーに相当する。
- ③ 綱引き…雌雄の綱をつなぎ、「ピニョモク」を差し込んで綱を引く。

類似性は細かく見ると、さらに出てくると思います。今回、初めて韓国の綱引きを見学して、アジア圏に分布する綱引き行事の地域性のつながりと、文化の伝播、伝統行事を保護しつつ、まちおこしに活用する行政との関わりに関心を抱きました。

[韓国の綱引き報告：  
平敷兼哉（宜野湾市立博物館管理係長）]



# 普天間飛行場に残るジノーンチユの生活



**凡例**

■ 塊村。屋敷が一か所に密集している。

□ 散村。屋敷が密集せず、広範囲に散在している。

散村の分布状況(赤道)。写真の黒い点一つ一つが当時の屋敷。

1945(昭和20)年の空中写真(米軍撮影)

普天間飛行場のある場所は、かつて宜野湾の人々の生活の場でした。そこは戦前の宜野湾村の中心的地域で、多くの集落と生活の糧を生む田畑、先祖がねむる墓や村の聖地などがありました。

戦後、多くの字では米軍に土地を奪われ、故郷に帰ることさえできなくなった人達が大勢いました。土地を奪われて60余年が過ぎ、かつての生活の場には今でも飛行場があります。しかし、その飛行場の中にもわずかながら、宜野湾の人々の生活の跡が残っています。今回はそのような"飛行場に刻まれた生活の記憶"を紹介していきます。

戦前の宜野湾村の中心地で、役場や市場、学校などがあつた字宜野湾は、集落すべてを飛行場に接収されました。しかし現在でも飛行場内には村の聖地と共同井泉が残っています。戦時体制下で途絶え、2007年に66年ぶりに復活した綱引き行事にもこれらの拝所を拝みました。

字宜野湾



飛行場内の拝所をフェンス越しに拝む  
字宜野湾の共同井泉のメーヌカー

2008(平成20)年の空中写真

あかみち赤道



家の跡。石壁と石柱が残る。  
井戸の跡

赤道は集落の一部を接収されました。上の写真は、左の空中写真の破線内に写る四軒の屋敷跡の現地写真です。そこには家の柱や壁、フール(便所兼豚小屋)、井戸などが残っています。井戸は、戦争から60余年たった今でも水をたたえています。

飛行場と墓



飛行場内に残された墓

飛行場内には宜野湾の人々の墓が多く残されています。墓は飛行場建設によって埋められたり、破壊されたものも多くありますが、現在確認しているだけで数百基あります。シーミー(清明祭)には基地内に入り、拝む人たちもいます。



敷き均らされた墓跡から収骨

あらくす新城

新城は集落すべてと田畑のほとんどを飛行場とキャンプ瑞慶覧の二つの基地に接収されました。飛行場内には新城の生活用水や信仰の場であった共同井泉のシマヌカーが残っています。戦時中、この井泉は新城の人々の避難場所となり、約300人々が助かった場所でもあります。



新城のシマヌカー

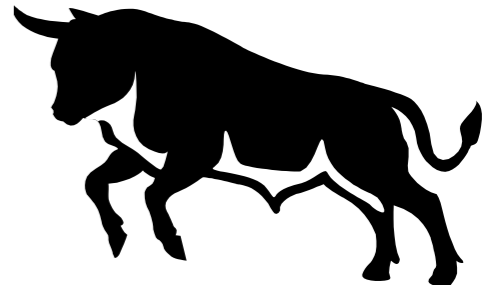
かみやま神山

神山は集落のすべてと田畑のほとんどを飛行場に接収されました。現在でも屋敷井戸など多くの集落跡が残っています。集落近くにはかつて闘牛で賑わったウシナー(闘牛場)の跡や、神山の聖地ティラガマも残っています。



神山の闘牛場跡

神山の聖地のティラガマ





# 普天間飛行場

## ～揺らぐ村民生活～

### ■ 村民不在

「鉄の暴風」と称されるほどの熾烈<sup>しれつ</sup>な地上戦を生きのびた人々を待ち受けていたのは、各地を流浪<sup>るろう</sup>する、難民としての生活でした。人々は収容所から収容所へと絶え間なく送り込まれ、とりわけ石川～仲泊以北の沖縄本島北部地域に人々の大半が集中しました。このことは、米軍が沖縄を日本本土攻略のための「跳躍台<sup>ちようやくだい</sup>」とする、さらなる軍事基地化によって引き起こされた結果でした。

普天間飛行場が着工されたのは、このように人々が大規模に移送されたなかのことでした。もちろん、このとき、宜野湾村民は不在でした。

### ■ 「戦後」のはじまり

1945（昭和 20）年 11 月下旬、沖縄各地の収容所から宜野湾村民の「帰村」が許可され、周囲には鉄条網が張りめぐらされた野嵩<sup>のき</sup>の地で宜野湾村の「戦後」がはじまりました。ただし、野嵩や普天間といった村の北端に設けられた狭隘<sup>きょうあい</sup>な居住地域では、すでに一万人以上の人々がひしめき合い、食糧不足、生活水の欠乏、衛生環境の悪化、耕作能率の悪さなどが訴えられていました。この当時、野嵩・普天間以外に村民の居住が許可された地域はなく、すなわち、それ以外の宜野湾村全域が軍用地でした。米軍の占領下において、町村の自主的な施政がきわめて限られるなか、宜野湾村当局は村民の居住地の確保、荒れ地の開墾に尽力しました。

### ■ 揺らぐ村民生活

嘉数、我如古地区の居住許可を皮切りに村民分散が次第に促進されました。しかしながら、軍用地の開放は遅々として進まず、結果的に村民の居住分布は軍用地からはじき出されたかの様相を呈しました。字宜野湾出身のある女性は、戦後初めて見た故郷の風景を以下のように語りました。

「自分たちの家があった所は平坦な飛行場になっていて、昔の面影も何もなかった」

「平坦な飛行場」と化した故郷を目の当たりにしたこの女性は、そこにかつての生活の風景を見出せない。彼女はジープに乗った米兵に怯えながら、この頃まだ金網の張られていない普天間飛行場の中へと「自由に」行き来し、滑走路付近の農地を耕し、廃材を拾い、辛うじて生活を成り立たせました。

しかしながら、このような生活再建の細々とした営みでさえ、その先行きの見通しは不透明なものでした。字宜野湾の居住許可については、以下の条件が付されていました。

「軍が都合によっては若し立退命ぜられた場合は立退しなければならぬ」（引用原文ママ）

ここから見て取れるのは、基地の行方によってはその生活の根幹から揺るがされかねない、潜在的な流浪者の姿ではないか。本来、問われるべきは「基地が先に出来たか／民が先に住んでいたか」ではない。基地をめぐる村民生活の不可能性こそ、言及されなければならないのではないのでしょうか。



1945（昭和 20）年 普天間飛行場



# かかず 嘉数に注目!!

市史の  
お仕事いろいろ



## 慰霊の日-企画展

今年は「<sup>イクサバ</sup>沖縄戦 - 戦場になった宜野湾 -」をテーマに、特に嘉数高台での戦闘にスポットを当てて開催しました。写真パネル展示を主に、関連文書などの実物資料や、証言映像の上映なども行いました。6月16日～7月4日の短期間でしたが、800人余りの方々にご来場いただくことができました。ありがとうございました！  
また、関連イベントの講演会や巡見も盛況で、今後の励みになりました♪



## 講演会

6月19日、「<sup>イクサユウ</sup>歴史の証言 宜野湾の戦世を語る」を開催し、嘉数出身の<sup>ちばなせいとく</sup>知花清徳さんに戦争体験を、<sup>なかむら</sup>仲村元惟先生に沖縄戦と宜野湾の状況についての総合解説をしていただきました。

知花さんの“焼けて真っ白になった嘉数”の様子や、“戦後65年経っても普天間基地の騒音と危険性に悩まされ、未だ戦争は終わっていない”という言葉が印象的でした。



▲左が知花さん。右が仲村先生。

## 巡見

6月20日、「宜野湾の戦跡を歩く」を開催し、嘉数高台公園とその周辺の戦跡をめぐるしました。嘉数出身で、戦争体験者でもあり、聞き取り調査や文献調査などもされている<sup>みやぎいさお</sup>宮城 勲さんにガイドをしていただきました。実際に歩くことによって、宜野湾の戦争について、理解を深めることができました。



▲熱心な参加者の皆さん



▲宮城勲さん

～ 慰霊の日 - 企画展は、毎年6月頃開催しております。ぜひご覧ください！ ～



## 平和学習

～中部商業高校のみなさんと～

7月1日、中部商業高校の平和学習が嘉数高台公園で行われました。沖縄戦の概略説明や、公園内にある陣地壕・トーチカ・慰霊の塔・展望台などをめぐりました。短時間でのかけ足状態のうえ、あいにくの雨空でしたが、約630人の生徒さんたちは一所懸命聞いてくれました！



## 2010年度 沖縄県地域史協議会 総会および第1回研修会

5月28日、約30年ぶりに宜野湾市で沖縄県地域史協議会開催！嘉数高台公園と野嵩収容所跡（現在の野嵩一区周辺）めぐりなど、巡見内容盛りだくさん♪市町村史（誌）などの地域史作り関係者だけあって、みなさんメモを取ったり、写真撮影をしたり、とても熱心！あまりに熱心過ぎて、列がかなり乱れる場面もたびたび・・・（笑）

案内する側の宜野湾市史一同にとっても、とても勉強になった研修会でした◎



野嵩収容所めぐりに、飛び入りで説明をしてくださった島田さん。ハウスナンバー32のお宅の方です。いつもお世話になっております♪





# 公民館におじゃましてーす

## 『ミニ古地名展』開催



市史編集係では、宜野湾の古地名（戦前の地名・集落・暮らしの様子など）を聞き取り調査しています。

そこで、これまでの調査結果の報告と補足調査を目的として、調査を行った自治体の公民館で、『ミニ古地名展』を開催いたします。

戦前の宜野湾のことを知る貴重な資料になると考えていますので、お住まいの地域の公民館で開催された際には、ぜひお越し下さい！！



嘉数地域での聞き取り調査の様子

☆嘉数公民館からはじまります☆

期間： 9月27日（月）から10月8日（金）

※その他公民館については調整中。17か所の自治体を巡回予定です。

♡ 調査にご協力下さった皆様、ありがとうございました！ ♡

宜野湾市史出版物 2009（平成21）年度 年間売れ筋

## 人気ランキング BEST3



No. 1



←『宜野湾 戦後のはじまり』 ¥700

2009年3月に発刊されたこともあり、多くの方に購入していただきました。『市史8巻 戦後資料編Ⅰ 戦後初期の宜野湾』の解説書で、本市の戦後の様子を写真やイラストを存分に使用し、わかりやすくまとめたビジュアル本です。

→『ぎのわん 自然ガイド（第2版）』 ¥1,000

根強い人気で第2位にランクインしました。市内の植物・昆虫・地形などをフルカラーで解説している本書ですが、残念なことに現在在庫がなく品切れです。第3版の発行は今検討中ですので、発刊が決まりましたらお知らせします♪

No. 2



No. 3



←『写真集「ぎのわん」』 ¥1,500

宜野湾市の戦前、戦後の出来事を写真で

見ることができ、安定した人気を保っています。

ご家庭に1冊いかがですか。

※この他にも市史1～9巻、本市の歴史・文化・自然・戦跡に関する本が多数あります。

### ☆ 市史編集係からお願い ☆

市史編集係では、現在、「伊佐浜の土地闘争」に関して調査を行っています。皆様のご協力を頂けますようお願い致します。それらに関して、また、それ以外でも、ご自宅に、かつての宜野湾の様子をうかがい知ることのできる写真や書簡等の記録資料がございましたら、ぜひ下記連絡先までご一報ください。市史編集等様々な事業の貴重な資料として活用させて頂きたいと思っております。なお資料は、接写などの方法により複写させて頂いた後、原本をお返し致します。

TEL 098-893-4430 ☆ FAX 098-893-4434

